

# 総合的な学習の時間で子どもが変わる

～ 総合的な学習の時間を軸に教科等横断的な学習の創造 ～

富田林市立向陽台小学校 教諭 中條 佐和子

## 1.はじめに

総合的な学習の時間(以下、総合的な学習と記す)では、子どもたちに自己の生き方を考えてほしいと願っている。そのために、実生活・実社会から課題を見出し、その課題と向き合い、自分なりによりよく解決する体験を積み上げてほしいものである。そして、取り組んだ学習活動が実生活に役立つ有用感を得ることによって、学ぶ意味を自覚してほしいと考えている。

2015年度に出会った6年生の子どもたちは、自分の思いに素直であり、何事も率直に自己を表現していた。しかし、その率直さは、時には怒りの言葉を他者にぶつけるものであった。4月に最も気になった言葉は「死ね」だった。また、「それが何に役に立つの?」という学習に対して投げやりな態度も気になった。

そのような子どもたちであったからこそ、総合的な学習を思いっきりしようと考えた。総合的な学習を軸にした教科横断的な学習を通して、学ぶ面白さや人のために行動する喜びを知ってほしいと願い取り組んだ。

## 2.テーマとゴール、学習の流れ

6月に総合的な学習のテーマとゴールを子どもたちに提示した。本テーマにした理由は、子どもたちに命と生き方について考えてほしかったからである。

〈テーマ〉

『東日本大震災の被災者と共に生きる人々から学び、自分の生き方を考えよう。』

〈ゴール〉

①人のために行動できる人になる。②学年目標「ひとりみんなのために、みんなはひとりのために」を実践する。③学んだこと、感じたことを生活の中で活かす。④6年生にしかできないことをする。

〈総合的な学習の流れ〉全40時間

\*ふれる:学習のテーマとなる課題にふれる。

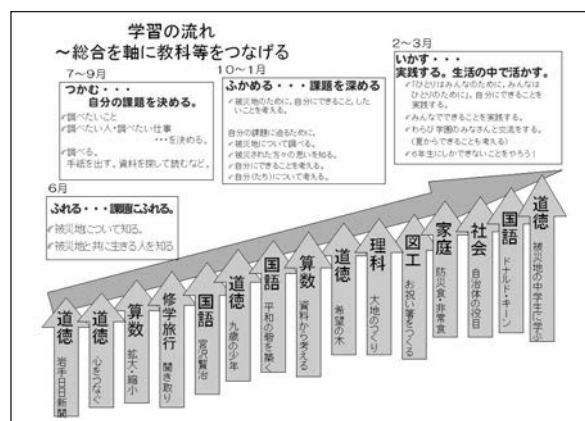
\*つかむ:個の課題、学級全体の課題をつかむ。

\*深める:課題を追究する。

\*いかす:学んだことを生活に活かす。行動する。

〈カリキュラムの工夫〉

子どもたちにとって学校での学習が意味あるものになるよう、総合的な学習と教科等の学習の往還を心がけ、総合的な学習を中心に文脈のある学びにすることを理想としている。そのために、下図のように、年間計画の入れ替えや教材の追加など、カリキュラム編成を工夫した。もちろん子どもたちの関心やその時々状態によって変更や改訂を随時行った。



## 3.学習の実際

### (1)ふれる(課題にふれる)

2011年3月11日の東日本大震災が起こった時、子どもたちは1年生であった。「大変なことがあった」「怖かった」という印象はあっても、具体的な出来事や被災地の状況については、ほとんど知らなかった。そこで、1学期は、震災当時の映像や新聞記事、手記等から『震災と被災地について知る』ことから始めた。子どもたちは「自分の身に起きていたら、怖くてその場に座り込んで泣きじゃくっていたらどうだろう」状況下で「いろんな人が必死になって、生きられるかもしれないと希望をもち、最後までがんばっていた」ことに心を揺さぶられたようだった。

### (2)つかむ(課題をつかむ)

卒業前の子どもたちには、なりたい職業や理想とする人物像を見出してほしいものである。そこで、様々な職業の人たちがどのように被災地と関わっているのか学習した。そして、調べたい人や職業を決め、資料を探したり、直接手紙を出したりすることを担任から提案した。しかし、被災地の様子や相手のことを知った上で、

質問を含めた手紙を出せた子どもが半数。なんとか手紙を出しても、頂いた素晴らしい手紙をじっくり読んで活用することがなかなかできなかった。文字資料のみで学習を進めることの難しさを感じた。

夏休み明け、一人の女の子が「先生、手紙は書けないけど、千羽鶴つくったよ」と千羽鶴を持ってきた。夏休みにコツコツと作ったそうだ。千羽鶴は、岩手県大槌町役場の方から紹介していただいた社会福祉施設わらび学園に送った。子どもたちにとって、被災地は、「遠い存在」「遠い課題」ではなかった。被災地に心を寄せ、自分なりの方法で何かをしたいと思っていることが見て取れた。

そこで、9月に「震災を知るためにしたいこと」「わらび学園を支援するためにしたいこと」の2点について全員で話し合った。「知る」ために、震災の疑似体験、避難所体験、震災の劇、防災食の試食をみんなでしたい。「支援」のために、販売、リサイクルショップがしたい。更に、独りよがりな学習活動にならないように、「もっと被災地について知ろう!」と決意した。この時、ようやく学級全体で総合的な学習の目標を共有することができた。

### (3) 深める① 人とつながって

被災地を「もっと知る」ために、人とつながろう!と、大槌町のわらび学園との交流を続けた。また「被災地と共に生きる」方々との手紙の交流も続けた。

11月には手紙の相手と出会えた。震災直後に被災地支援に行かれた富田林市危機管理室の方、岩手県庁で被災地支援をされた方、更に陸前高田市で被災され息子さんを亡くされた方とつながり、学校で直接お話を伺うことができた。

この出会いから、子どもたちは多くのことを学んだ。1つめは、命の大切さである。「お母さんがいつもどんな思いで、私たちを育ててくれたのかということも、同時に知ることができました。自分の命を守ることに付けたして、家族も大切にしないといけないなあ」と思えた。また、気に入らないことがあれば「死ね」と言い続けてきた子は「死ねって言ったらかんない。これからできるだけ言わないようにする」と自分を振り返り、ことばに注意するようになった。

2つめは、人とのつながりの大切である。「人は助けて、助けてもらうものだと思います。」「自助・共助」の大切さと、日常的な人との関わりが緊急時に大きな支えになることを学んだ。

3つめは、正しく判断するために「想像力を働かせる」大切さである。咄嗟の判断をするためにも、支援をするためにも、想像力が必要である。豊かに想像するためには、豊かな知識と相手の立場になって考える思

いやりの心が大切だということ学んだ。その後、子どもたちは、必要な知識を得るために自分で資料を探したり、得た情報を活用したりするようになった。

4つめは、人との出会いが自分たちに多くの学びをもたらしてくれることである。「この一期一会の出会いを大切に、これからの学習に活かしていきたいと思いました」と、学んだことを次の学習活動に活かすようになった。



### (4) 深める② 体験とつながって

子どもたちは、富田林市危機管理室の方をお願いをして、避難所体験を行った。

1月28日5・6時間目に学校に備蓄している防災備品を出して、その使い方を教えてもらい、非常食も試食した。その後、子どもたちは一端下校し、自分なりに考えた「避難グッズ」を持って、午後5時に学校に「避難」した。体育館で持ってきた「避難グッズ」を見せ合い、それを持ってきた理由を話し合った。30分で家の中から「避難グッズ」を見つけ出すことはなかなか難しいこと、「ない」なりに果物など日常的にある物で工夫できることなど、多くのことに気づくことができた。最後は、体育館を真っ暗にして、床に5分ほど寝転び、暗闇と静寂と冷たさを体験した。これまで見聞きした体験者のことばがリアルに捉えられたようだ。この体験で点在していた知識がつながり、避難所で生活する自分を現実的に考えることができた。「お母さんは何も用意していないから、今度お母さんを連れて買いに行きます」など、自分のできることを考え、自ら実践するようになった。



### (5)深める③ 教科とつながって

教科で学んだことを総合的な学習に活かし、総合的な学習で学んだことを教科で確認するなど、教科と総合の行き来を大事にした。例えば、算数では、拡大・縮図の学習から大槌町の大きさを調べたり、資料の読み取り教材から備蓄品について考えたりした。国語では、『平和の砦を築く』から震災遺跡を遺すかどうかについて討論した。道徳では、読み物資料を通して「被災地と共に生きる人」に「出会い」、「責任」「勤労・公共」「思いやり・感謝」等について考えた。総合的な学習と教科等が関連づくことによって、子どもたちの学びがつながり、総合的な学習を軸に文脈のある学習活動になっていた。

### (6)深める④ 友達とつながって

3学期には自分たちのやりたいことがより明確になった。9月の話し合いで決めた「震災を知るためにしたいこと」が「震災を伝えるためにしたいこと」に変化した。「わらび学園を支援するためにしたいこと」はより具体的になった。そして、学年で5つのプロジェクトチームをつくり活動した。

例えば、震災を伝えるための防災パンフレットチームは、自分たちで内容を決め、分担した。調べたり文章を考えたりするのは各自に任せられた。宿題や家庭学習ノートをなかなか提出しなかった子どもも、「これはしないと、うるさいんだよな」と言いながら家で調べ、まとめたノートを提出しなければならなくなるぐらい、互いに声をかけあい取り組んだ。個々に課題を抱える子どもたちも、友達に励まされながら、自分のすべきことを最後までやりきることができるようになった。

### (7)いかず(行動する)

2月は下級生や保護者、地域の方に自分なりの方法で「伝える」ことと、大槌町のわらび学園を「支援する」活動に取り組んだ。それは、探究的な活動になっていった。

例えば、地域の祭りでわらび学園の委託販売をするチームは、「損をしない」ための工夫を考えることにした(課題設定)。わらび学園に物品の値段と送料を尋ね(情報収集)、1ついくらで売ればよいか計算をして販売価格を決めた(整理・分析)。自信をもって販売するために、すき昆布は実際に調理し試食した(情報収集)。そして、すき昆布は非常食・防災食として役立つことがわかり(整理・分析)、「おすすめレシピ」と共に「伝える」ことにした(まとめ・表現)。祭り当日は、お客さんの質問にもはっきり答え、宣伝も行き届き(まとめ・表現)、完売。目標額を達成することができた。

震災・被災地を「忘れず、伝え続ける」ために、子どもたちは3月11日にハナミズキを植樹した。植物園に行って木を選び、植え方を教えてもらい、大きな穴を掘って、植樹した。3月11日14時46分のサイレンが鳴ると「黙祷をしようよ」というつぶやきと共に、6年生全員が黙祷をした。他者に「伝える」ことも、被災地を「支援する」ことも、子どもたちが自分ごととして取り組んだ結果が表れた瞬間であった。



## 4.子どもの変化

総合的な学習で子どもは変わる。日々の子どもたちの様子、振り返りカード等から担任としては実感できた1年間であったが、子どもたちが「変わった」根拠をいくつか示したい。

### (1)アンケート結果から

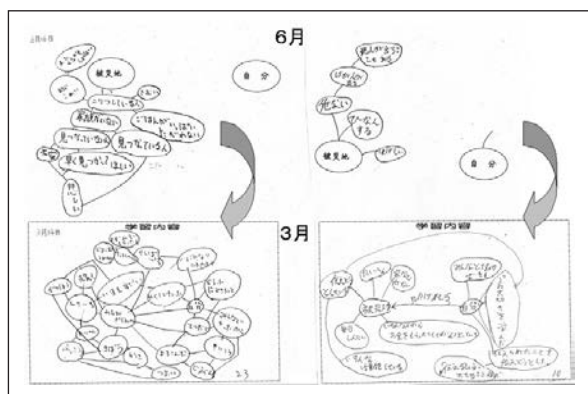
社会性尺度アンケートを7、12、3月にとっている。思う5点、まあまあ思う4点、どちらともいえない3点、あまり思わない2点、思わない1点とし、平均を出している。思わない、あまり思わないを「否定的捉え方」として、その割合を出した。その結果(一部)は下記の通りである。学校が楽しい、授業がわかる、授業を主体的に取り組んでいるなどの項目において否定的捉え方が減少した。

社会性尺度より 7月→3月	平均の変化	否定的に捉えている割合の変化
学校に来るのが楽しい	3.87→4.45	(否定17%→4.5%)
授業がよくわかる	3.98→4.20	(否定6.4%→0%)
授業に主体的に取り組む	3.79→4.16	(否定14.9%→4.5%)
相手の気持ちを考えて行動している	3.70→4.07	(否定12.8%→4.5%)
相手を助けてあげることができる	3.26→4.32	(否定25.5%→2.3%)
自分にはいろいろよいところがある	3.34→3.61	(否定21.3%→11.4%)

### (2)ウェビングから

総合的な学習のスタート時(6月)とゴール時(3月)に、被災地と自分についてのウェビングをした。6月には被災地と自分がつながらない子どもたちであったが、3

月には被災地と自分をつなげるようになった。「自分にもできることがあった」「役に立った」「喜んでもらった」「被災地はまだまだ大変」「20才の自分にできることを考える」など、ウェビングの中で、被災地と自分をつなげる言葉が増えた。「被災地」が自分ごとになってきた表れであると考えられる。



### (3)ピラミッドチャートと新聞等から

書くことが苦手な子どもたちも、「伝える」ための新聞作成には努力した。ピラミッドチャートで学習してきたことを振り返り、それを活用しながら新聞を書いた。その時、書くことに苦手意識を持ち続けていた1人の男の子が「先生、これって便利だな」と言いに来た。ピラミッドチャートで考えが整理されたので、新聞が書きやすかったようだ。彼は、自分で作ったチャートが次の学習に使える面白さを実感しながら、他者に伝わるよう、独りで新聞を書ききることができた。



### 5.子どもたちを変化させたもの

子どもたちを変化させたものは、当然であるが、子ども自身の力である。「自分を変えるのは自分」であり、「自分にスイッチを入れられるのは自分」である。

では、子どもたちは何によって「自分にスイッチ」を入れたのであろうか。まずは、人との出会いである。そして、同じ目的を持った友達との協働的な活動である。子どもたちは多様な他者と対話し、同時に自己とも対話し続けた。「被災地と共に生きる人から学ぶ」ことは、他人事ではなく自分事になり、「震災を伝えること」も「わら

び学園を支援すること」も、子どもたちにとって切実な価値ある課題となっていった。

課題に対して当事者意識が芽生えると、子どもたちは主体的に学び、探究的な活動を繰り返せるようになった。学ぶ意味を理解し、みんなでひとつのことに取り組む楽しさ、学んだことを生活の中で活かせる面白さ、自分たちなりに発信したり行動したりできる充実感、それらを子どもたちは味わった。このような学習への手応えは、学ぶことへの意欲や自信となり、さらに、子どもたちが自分ごととして主体的に学び、活動する推進力になったと考えられる。

### 6.おわりに

以上のような子どもたちの学びを支えたのは、総合的な学習を軸とした教科横断的学習活動である。様々な学習が総合的な学習を軸につながり、文脈のある学習活動が創られていった。そのため、子どもたちは関心をぶれさせずに、学習活動に集中することができたように思える。

今後も、子どもたちと共に、総合的な学習を軸に探究的な学習を創造していきたい。そのための要はカリキュラム・マネジメントである。総合的な学習と教科との連携、実施状況の評価と改善、物的・人的体制の確保を計画的、組織的に行うことにより、より効果的な学習を目指したいと考えている。